

ベニゲンペイカズラのわい化栽培（予報）

福 留 弘 康

緒 言

観賞用植物類は、ガーデニングなどの流行もあって、家庭に広く浸透しつつあり、その中でも鉢花は特に好まれる傾向にある。これまで鉢花のひとつであるゲンペイカズラ (*Clerodendrum thomsoniae* Balf.) に注目し、この植物の具体的な栽培条件や繁殖方法について試験を行ってきた。1993年3月、ゲンペイカズラの交雑種であるベニゲンペイカズラ (*Clerodendrum* × *speciosum* Lem.) が指宿植物試験場に導入された。この植物は、開花時にかく片は桃色に、花弁は赤色になる特徴があり、性状はゲンペイカズラによく似ているが、ゲンペイカズラ同様の栽培条件下では茎が徒長しやすく、草姿がまとまりにくい欠点を有する。

一般的に鉢物の草姿は「引き縮まっている」ことが商品価値を高める一つの条件とされる。この鉢生産法は様々であるが、そのひとつにポットマム（キク）やポインセチアなどの伸長抑制に用いられているわい化剤の利用が挙げられる。そこで本実験では、ベニゲンペイカズラに対し試験的にわい化剤を利用し、茎の伸長抑制の可能性を検討した。

材料と方法

1997年6月11日、プラスチック5号鉢に3本植えて栽培していたベニゲンペイカズラを6号黒ポリポットに移植し、草丈が約50cmに伸長した7月17日、アーチ状に十字がけした支柱（高さ28cm）に沿って誘引した。肥料は油粕：骨粉：高度化成（16：16：16）をそれぞれ3：1：1に配合し、1鉢当たり3g（N：0.2g、P₂O₅：0.3g、K₂O：0.1g）ずつを置肥した。8月26日ほぼ生育の揃った鉢を選び、わい化剤処理を行った。わい化剤はウニコナゾールP（商品名スミセブンP、ウニコナゾールP含有量0.025%、アグロス社製）を使用し、無処理区、スミセブンP25倍希釈区、同50倍希釈区、同100倍希釈区（以下25倍区、50倍区、100倍区という）の4処理区を設けた。各処理区とも1処理区当たり4鉢を供試し、1鉢当たり25mlを葉面散布した。なお、無処理区は蒸留水を用い、その後の管理は慣行法とした。

調査は、わい化剤処理以降に伸長した側枝の長さ（最長、2及び3番目の長さの側枝）とその発生部位（第1図）、最長側枝の節数並びに節間長について1998年1月19日に行った。

結果と考察

最長側枝から上位3番目までの側枝長は、いずれの処理区も無処理区より抑制された。平均側枝長では希釈倍率が高い処理区ほど伸長抑制効果が高い傾向が認められ、側枝長がもっとも抑制された100倍区では、無処理区に比べ68%程度伸長が抑制された。（第1表）

最長側枝の発生した部位は上部が8鉢、中間部が3鉢、下部が5鉢であり、上部が若干多くなったが、発生部位に明確な傾向は認められなかった。

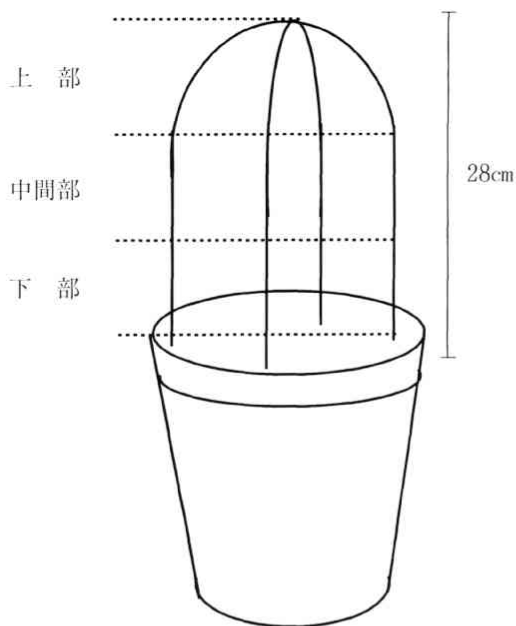
最長側枝の平均節数は、無処理区が9.3節、25倍区が11.0節、50倍区が10.5節及び100倍区が10.8節で処理間にはほとんど差異は認められなかった。しかし、平均節間長は、無処理区が5.6cmに対し、25倍区が4.1cm、50倍区が4.9cm及び100倍区が4.2cmと処理区が明らかに抑制された。一般的にわい化剤によるわい化作用は、節数には影響を与えず、節間長の減少によるとされるが、ベニゲンペイカズラでも同様な結果となった。

以上のことより、ベニゲンペイカズラはウニコナゾールPを使用することで、十分に側枝の伸長を抑制することが明らかとなった。わい化剤の種類は多く、葉面散布よりも土壌灌注のほうが効果が高い場合や処理時期や濃度によりその作用に違いがみられることが知られている。本実験でも希釈倍率が高い100倍区の効果が高くなったが、今後は最適濃度だけでなく、時期や回数、処理方法などについても検討していく計画である。

第1表 ウニコナゾールPがベニゲンペイカズラの側枝長及び節数に及ぼす影響

	無処理区	25倍区	50倍区	100倍区*
最長側枝長 (cm)	52.5	46.0	52.0	46.3
第2側枝長 (cm)	40.6	36.5	20.1	21.9
第3側枝長 (cm)	28.6	19.4	14.3	14.6
平均側枝長 (cm)	40.6	34.0	28.8	27.6
最長側枝節数	9.3	11.0	10.5	10.8
最長側枝節間長 (cm)	5.6	4.1	4.9	4.2

*スミセブンPの希釈倍率



第1図 支柱の立て方



第2図 ベニゲンペイカズラ